

# 全体討議

○丸山 それでは、全体討議に入りたいと思います。本日は学内の異文化コミュニケーション学部、観光学部の先生もいらしていただいていますし、それから、他大学、他部署、学生さんも来てくださっています。ぜひ活発な議論ができればと思いますので、ご協力よろしく願いいたします。

まずは、質疑応答ですね。少し私たちのほうでも論点を用意してございますが、その前に先ほどお話を聞かれて質問等ありましたら、まずそれをお受けしたいと思います。いかがでしょうか。ご質問の際には、マイクでご所属、お名前をお願いいたします。はい、どうぞ。

○加藤 テンプル大学ジャパンキャンパスの加藤と申しますよろしく願いいたします。

よく、アメリカの大学だとディスカウントレートといって、ものすごく学費は高いんですけども、奨学金を出したりとかローンを出したりする仕組みがあります。ディスカウントレートは平均的には私立大学で40から50%と言われてはいるんですけども、例えば、日本の大学さんでは何%ぐらいの奨学金を、特に留学生に出していらっしゃるのか、もしご存じなければ、御校の立教大学さんの例でもいいんですけども、教えていただけますか。先ほど堀中さんのお話で、入学金をあとから減額はするけれども、学費自体に対する奨学金はどのぐらいあるのかといったところ。よろしく願いします。

○堀中 本学についてお話ししますと、本学には授業料減免制度というものがございます。この制度は経済的に就学困難な私費外国人留学生を対象に行っており、外国人留学生に全員一律に適用しているものではございません。入学後に、希望者は経済状況を示す書類の提出等、所定の手続きを行います。審査を経て適用になった学生は、学費のうち、授業料の部分が、2018年度でいうと30%減免になるという制度があります。そのほかに、外国人留学生を対象とする奨学金というものがありまして、2017年度実績では立教独自の奨学金を受けているのは約20%です。そのほか、学外の様々な奨学金を受給している学生が約20%で、合わせて約40%ほどの学生が受給しているということになります。

○丸山 よろしいでしょうか。ありがとうございます。ほかにいかがでしょうか。韓先生、お願いします。

○韓 立教大学観光学部教員の韓と申します。つつい専門柄、観光の旅行にちょっと興味があるんですけども、きょうは学内外の先生がた4人のお話を聞いて、とてもよく事情がわかりました。丁寧なお話をありがとうございました。ゲストの4人の方に該当するようでしたらお話をさせていただければと思います。外国語の専門の学校の先生方でもあると思うんですけども、高校の在学中に日本に直接来て旅行したり、日本の修学旅行のように、高校の学生が学校のプログラムで日本に来てほかの高校を訪問したり、もし



しくは大学を訪問したり、あと東京や大阪とかを見学したりとかいう修学旅行のプログラムがあるかということと、また、修学旅行ではなくても、一部の優秀な学生を集めて研修というようなものがあるか。それから、日本の高校との交換留学で半年か1年か、あとは数カ月かもしれないんですけども、そういうことで、大学に来る前に高校時代に日本に来て生活をした経験がある学生は入学しやすいと思うんですけども、その辺について、もし今ご自分の経験から、そういう学生がどれぐらいいて、増えているのか。そういうことを経験した学生が留学するケースが多いのかというのをちょっとお聞きしたいんですけども。

○郭 ご質問ありがとうございます。私の所属の学校の事情についてちょっと話させていただきますと、まず海外留学経験あるいは海外、日本にいたことがある生徒の割合でいきますと、うちの学校は80%に近い生徒は高校、あるいは中学校の在学中に1回、自分が学んだ言語の国に行くことはあるかと思います。多分、中国では比率的には高い方なので、一般的には、正確な数字は出せないんですけども、10%ぐらいはあるんじゃないかなと思われま。

それに関連することでもありますが、おとといのニュースだったんですけども、日本の千葉大学が100%留学を目指すというニュースが出ているんですけども、実はうちの学校も今100%を目指して、100%の在校生に自ら外国に行って体験してもらいたいという気持ちがあるので、それを目標として頑張っております。

2番目の質問についてですが、交換留学なんですけれども、私が今所属している甘泉外国語中学の例でいいますと、日本の高校と8校と協定を結ばせていただいて、1カ月、1週間、半年、1年間の交換留学を実施させていただいております。特に1年間とか交換留学で帰った子は、ほぼ100%日本の大学に留学することになっています。理由の1つとしては、やっぱり日本の文化が好きになったとか、日本の大学、学校の雰囲気好きになったというのは多いんですけども、もう1つ、ちょっと正直に言いますと、やっぱり日本の高校で学んだ内容が中国と同じ学年で学んだ内容と比べると簡単なので、1年間留学して中国に帰った子は、もう国内の受験勉強についていけなくなったのが正直な気持ちなので、研究に力を入れている日本の教育は中国の受験勉強にはちょっと合致していないというところがあるので、そういう意味では、やっぱり交換留学はその子に対して影響はすごく大きいと思います。

○丸山 ほかの先生、いかがでしょうか。

○ゼニ 質問ありがとうございます。インドネシアでは、全部の高校ではなくて、1つか2つの高校はプログラムがあります。交流、姉妹校もパリのウブドに来ました。毎年、この学校は日本に行って交流もしました。

○ミビン ご質問ありがとうございます。まず、1つ目のご質問ですけれども、中等教育における高校は、まだ日本への旅行とか、実験で研修みたいな計画というか、そういうスケジュールというか、そういう内容はまだ導入されていないです。でも、2番目のほうは、旅行、研修ツアーみたいなのではないですけども、一部の高校では、例えば、協定校との短い期間に日本に来て、実施しております。ただ、これは非常に限られています。人数も少ないですね。そして、これの研修期間にかかわる旅費とか経済費などは、ほぼジャパンファウンデーション、国際交流基金とか在ベトナムの日本大使館のほうから、多く支援してもらって日本に来ています。毎年3名か4名ぐらいと人数は限られています。以上です。

○アンナ ご質問ありがとうございます。ちょっと見学のプログラムにコメントをしたいんです。私はちょっとうちの学校にそういうプログラムをしてみたかったんですが、先ほどお話ししたとおり、経済的な問題がありますから、多くの家族はそういうプログラムができないと思います。そして、見学にちょっと楽しく行っている子どもたちがいましたが、でも、ちょっと留学としてそういう旅が続くのはまだできないと思います。

私の住んでいる町、モスクワは、本当に東京とか、ほかの日本のまちから離れていますから、17歳とか18歳の子供が一人暮らしをすることはできないと思います。だから、大人になって自分の生活ができるようになったら、もう一回、留学で戻りたいと思うと思います。

○丸山 よろしいでしょうか。ありがとうございます。ほかにいかがでしょうか。お願いいたします。

○浜崎 異文化コミュニケーション学部の浜崎と申します。お話どうもありがとうございました。幾つかちょっと具体的な質問をさせていただきたいんですが、郭先生のお話の中に、日本の大学でも出張講義をしている大学があるというお話を伺って、これは我々の課題だなと受けとめました。

幾つか先生が覚えていらっしゃる例を教えてくださいたいんですが、どのような専門分野が生徒たちの関心を引いたか、それが生徒たちの進路を決めるにあたってどんな効果をもたらしたかということをお話いただけますか。それから、もう一つ、ミビン先生にお伺いしたいんですけども、ベトナムの高校生たちが日本への進学ということをお話されたときに、幾つか日本に行くことと進路が狭まるんじゃないかという懸念がある。例えば、その学部あとの進学先の選択肢が狭まるんじゃないかとか、就職先が狭まるんじゃないかという懸念があるって話を教えてくださいました。そういった生徒たちにとって、今、魅力的な留学先というのは、国や地域でいくとどこなのかということをお話いただけますか。以上2点です。

○丸山 郭先生からお願いします。

○郭 ご質問ありがとうございます。先ほど申し上げた出張講義の内容についてなんですけれども、私の知っている限りでは、各大学の違うやり方というか、異なるやり方で実施されているというところが多いので、1つ例で言いますと、先ほど写真でも出たような大阪市立大学の場合ですと、たしか去年度12月頃にいらっしゃる先生方なんですけれども、4つの分野、生物、環境、文学、経済。それぞれの各学部の教授先生に来ていただいて、自分の研究についての授業。大学で実施された授業と同じような授業をしていただいたと思います。例えば、生物の先生だったら、ハチの研究をされているかたで、どういうふうにはちを解剖して、そのハチの研究をして何の役に立つのかということについて、環境問題を研究している先生だったら、今、日本の直面している環境問題とか、そ

これはこれからの中国もどういうふうに直面するかとか、あと、文学の先生だったらアニメについての話。アニメの制作に注目するところとか、そして、経済の先生、中国人の先生なんですけれども、中日の経済の比較など、私の感じているのは、中国の生徒たちは学習力は高いにもかかわらず、自分の方向がわりと見えていない人多いんですね。そういう外部からの刺激が少ないというのも、今、中国の教育の問題点の1つなんです。ですから、やっぱり生徒たちの趣味に合わせる必要はなくて、その学校が今実施している各専門のことを紹介していただけると、興味がわいてくると思うんですね。その生物の先生の授業が終わったら、生徒たちの質問の中では、今の一番問題になっている人間のDNAの改ざんとか、そういう問題についてどう思われますか、みたいな質問が出たので、やっぱりそういうふうに関心からの刺激をどんどんもらって、生徒たちが成長、しかも自分のこれからの道がもっと明確に見えるんじゃないかなと考えておりますので、ぜひともよろしくお願いします。

○丸山 では、ミビン先生。

○ミビン ご質問に対してお答えいたします。先ほど私の説明、多分ちょっと不足というか、ちょっと足りなかったもので、加えたいと思います。日本への留学志向についてのベトナムの幾つかの壁、課題は先ほど述べましたけれども、実際には日本への留学を希望する学生が一番多いですね。なぜかという、日本はベトナムと近いし、あと、特に日本へ留学すると、アルバイトとかできます。なので、経済的なことは一部解決できるからです。それに対して、本当に行きたい、一番行きたいと学生たちが思うのは、やっぱりアメリカとかヨーロッパなどです。しかし、そちらの国では、アルバイトとかできなかつたり学費も高かつたりするので難しいです。それに対して日本では、アルバイトができますし、ベトナムからも近いです。その点からいえば、一番魅力的な留学先といえば、現在のところはやっぱり日本かなと思います。ちょっと誤解させてしまったでしょうか。すみません。以上です。

○丸山 ありがとうございます。ほかにいかがでしょうか。どうぞ。

○石渡 私は拓殖大学の国際課の課長をしています石渡と申します。本日は土曜日、午後休を取りまして、ゆっくり午後お話を聞こうと思いました。部下がベトナム人なんですけれども、別科の日本語教育課程も担当しまして、その部下のベトナム人、女性なんですけれども、ベトナム人も多いものですから、きょうは土

曜日、一人でお願いします、私はこちらに来ますから、話を聞いてきますよと言ってきょうは参りました。貴重なお話をいろいろありがとうございました。

本日のテーマも日本語教育と、そういった日本語を海外で学んでいる学生さんたちを日本でどう受け入れるかということで、私も別科のほうを担当しまして8年、毎日100人以上の留学生を見ていまして、特にベトナムの学生が最近多くなってきました。その中で、ますます、本学も1万人ちょっといまして、10%、1,000人ほど留学生がいて、留学生がいた大学としては先駆者的な存在だったと思いますけれども、ほかの大学さんのご尽力もあって、いろいろなプログラム、政策とか駆使されて、順位は下がっていますけれども、中身はいまだに濃いかたと自負しているところです。

大学を中心に受け入れ体制、御校もほかの大学さんもますます細かく丁寧に受け入れようと模索していると思うんですけども、現地の、例えば、中国ですね。ロシア、インドネシア、ベトナムの現地の、例えば高校とか、高校はまだまだ現地のいろいろな就職とか留学とか、国を隔てているので、大学とは正直レベルが違うと思うんですけども、大学さんのほうでもそうですけれども、日本語を学ぶとか英語を学ぶ。じゃあ、そういう言葉を学んだら海外にぜひ行ってくださいという指導も含めて、学力も含めて、どういった指導をされているのか。あるいは、そういった指導の部署、例えば、うちでしたら国際部国際課とか、あとは留学、こちらでしたら日本語教育センターで受け入れ、あるいは、現地と提携して



こういう指導をしてくださいとかやりとりをしていると思うんですけども、それぞれの国での現地の留学指導の専門的な部署。いまだに先ほどのセミナーの中身でも、中国でも情報が足りない。そこをつかさどっている専門的な部署が足りないんだと思いますね。教えている先生はたくさんいます。学生はいます。中間をつかさどる専門的な情報をつかさどっている部署が足りないのかなと。13年前に私が拓大に入ったときもそうですし、きょうのセミナーでも情報が足りないと。そこを常につかさどっているところがないのかなと思ひまして、質問いたします。

あと、事例でいうと、本学別科1年費やして、学部に入って、工学部で学んで博士課程まで行って10年いたベトナムの先生ですね。ハノイ国家大学の工科大学の、今、ハノイでグエン・ベトハ、お調べいただければおわかりになる、男性なんですけれども、本学で10年費やして、本学の中の留学生の対応の仕方、指導の仕方、双方向での留学の仕方とか受け入れの仕方、いろいろな部署の機能を、ベトナムの国家大学の工科大学に戻って、自分が学部長になったときにそれを浸透させようと。このような目標を達成して学部長になったんですね。今、現在学部長やっています、数年。いろいろな、昔なかった部署をつくったわけです。留学の指導とか、学務系の部署とかですね。そういったところも日本の大学のいいところ、細かな指導のいいところを現地に持ち帰っていただいたという事例があります。話が長くなりましたが、それぞれのお国でそういった留学の指導の専門的な部署、そんな組織づくりというのはどうなっていますかねという質問です。よろしく願ひします。

○丸山 ありがとうございます。では、順番に。

○ミビン ありがとうございます。留学機能を指導する部署みたいなら、ベトナムでは、大学なら、全体ではないけれども、ちょっと大きい大学とか、中央的なところ、例えば国家大学とかは、実はあります。あるんだけれども、あまり効果的に仕事をしてくれないですね。大学はあるんですけども、高校ではそういう部署はまだないです。

さっき私が申し上げました外国語大学の附属高校ですけども、この高校はとても有名で学習者の数も多いし、留学するみたいな希望とか申し込むと高いですけども、そのような独立の部署はまだないです。それが今の現状です。

○郭 ご質問ありがとうございます。私の個人的な感想というか、今している情

報から見ると、今、中国の高校では、特にエリート校では国際部がすごく流行ってきていて、ほとんどのそういう進学校には国際留学、外国留学の指導もできているんじゃないかなと考えております。

ただし、その中のほとんどはやっぱり欧米志向の学校や生徒が多いので、特にアメリカの留学だとすると、全米例えばトップ50以降の学校だったら、TOEFLの成績だけで申請することができるので、わりと簡単ですし、しかもそういったアメリカの大学とかは、すごく中国での宣伝が多いので、そういった意味での国際部というのとはところどころあるし、増えていると考えております。

ただし、うちの学校はちょっと特別で、私はもう1つ担当させていただいているのは、学生進路指導センターという部署なんですけれども、立ち上がったのは2014年、5年前だったんですけれども、日本留学をメインにしているんですね。専門のオフィスもあって、各日本の大学のパンフレットとかも置かせていただいて、日本留学試験の本とか、ほかに3,000冊ぐらい日本語版の図書とかも置かせていただいているので、みんな情報とか聞きに来てくれるんですけれども、ただし、気づいたことは、本を置くことだけでは宣伝にはなっていないんじゃないかと思うんですね。立教大学の情報も、正直に言って立教大学の先生がいらしたことがあるんですけれども、会うまでには日本で初めて博士号を取れる観光学は立教大学観光学部などすら知らなかったんですね。そのように、先生でも知らない情報なので、どういうふうに生徒たちに伝えるかというのはすごく難しいので、やはり日本の大学の先生にみずから来ていただいて、生徒たちと面と向かって宣伝していただくほうが効果的じゃないかなと気づいたことなので、ご参考になればと思います。ありがとうございます。

○丸山 では、アンナ先生。

○アンナ 今、日本へ留学する人数自体がそんなに多くないですから、特別なサポートをする部署はないと思います。でも、一番多い情報は、いつも国際交流基金から得ることができます。そして、留学を促進したいという点については、海外に留学センターという会社があって、そういう、例えば、東京にある2つの会社にはロシア人がいて、そして、2人のロシア人は海外の学生にサポートすることができますと思います。だから、この会社のホームページに行って、直接、情報を得ることも可能です。

○ゼニ インドネシア国では、高校生の留学をサポートする部署はあまりないで

すね。それで、高校を卒業した生徒は、やっぱり文部科学省に申し込みます。奨学金が必要ですから。

○丸山 よろしいでしょうか。それでは、少し私たちのほうで用意した論点が3つほどありますが、時間も限られていますので、選んで進めたいと思います。まず用意した論点を3つ読み上げますので、関心のあるところで挙手をお願いします。それで多数決で話せるところを集中的に議論してまいりたいと思います。

1つ目は、多様な留学生との学びは大学をどう変えていくのかという、本日のテーマのサブタイトルに掲げているものでございます。2点目は学位取得を目的とした日本留学を考える学生に大学のどの点を見てほしいかというものです。こちらは海外の現場の先生からの視点と、それから、国内にいる者が期待するものというのが同じなのか違うのかというようなこともディスカッションできるかなと思いますので出しております。それから3点目でございますが、多様な日本語力、きょうは高校を卒業したときの日本語力がさまざまであるということが確認できた会であったと思うんですけども、直接、大学に入学するというようなことを考えたときには、大学は多様な日本語力の学生を迎えることになります。そのときに一体どういった体制が必要なのかということでございます。

皆様ご自身で、これが議論したいと思うところで手を挙げていただければと思います。では、1点目にまいりたいと思います。1点目、いかがでしょうか。お一人です。2点目、いかがでしょうか。6、7人。3点目、いかがでしょうか。わかりました、ありがとうございます。それでは、3点目について、話を進めていきたいと思います。

まず、多様な日本語力の学生を迎えるために何が必要かということで、本日、池田副所長のほうからは、英語トラックの話であるとか、それから日本語集中講義の話とかというのがご紹介されました。こちらをまずたたき台にして、皆様からご意見をちょうだいするというふうにすると話が進みやすいかなと思います。いかがでしょうか。池田先生から？

○池田 では、そこについてもう少し補足なんですけれども、立教大学としては、English Track と俗に言われている、英語だけで学位が取得できるコースということと、それからやはり日本の大学ですので、日本語を使いながら学位を取得していくコースというところを2つ、二本立てで考えていく必要があると思って

います。

その理由としては、きょうご登壇いただいたような国から来ていただく留学生が、なぜ日本の大学を選ぶのかという背景には、日本というコンテンツ、それから日本の社会での就職、あるいは、日系企業、日本語をもって自分の国で働きたいというようなところが少なからずあるのではないかと考えていますので、そういう学生さんに対して、English Track というものを最前面に出して広報していくということはあまり得策ではないだろうと考えています。ただし、ヨーロッパの大学のニーズを調査をしていくと、やはり英語で学位を取得できるコースに対する熱いニーズは依然としてあります。ですので、両方きちんと整えながら、受け入れていく必要があると思っています。

また、多様な日本語力の学生が入ってきたときに、立教大学でいうと10学部あるんですけども、その学部に入ってきてくれる時点で、どの程度やっぱり日本語の力が必要だというふうに各学部がお考えなのかというところは、やっぱり大切にしながらデザインをしていかなきゃいけないと思っていますので、その学部の意見を伺いつつ、そこにつなげていけるような日本語教育というのを考えないといけないと思っています。

○丸山 ありがとうございます。菅沼先生、いかがでしょうか。

○菅沼 経済学部の考え方ということになりますけれども、経済学部は立教大学の中では非常に学生数が多い学部であるということと、やはり一番大きい学生層というのは日本人の学生さんであるということがあります。そこで、英語で卒業できるコースをつくるというのはなかなか難しい。つまり、たくさんの英語の科目を準備しなければいけないということになってなかなか難しい。基本的には、やはり留学生の方も、学部について言えば日本語で勉強していただきたい。日本語の能力をきちんと習得してほしいなと思っております。

1年次に入ると4月、5月ごろから、先ほど申しあげましたように日本語の岩波新書とか中公新書といわれるようなもの、これは日本の大学1年生にとってやや難しい本です。それを読むということになりますので、入学時にある程度の日本語能力はやはり欲しいなと思っております。

ただ、入学前におそらくもう少し日本語を勉強する時間は留学生の方はあるのかなと思っておりまして、入学前に、拓殖大の別科というようなのがご紹介されましたけれども、そういうふうな入学前準備として日本語を勉強できるようなプ

プログラムというものをつくるのもよいのかなと思っております。やはりある程度の日本語能力は欲しいというのが、受け入れ側の気持ちであります。

ただ、1年次については、何らかの新しい科目を検討するということは今後考えたいなと思っております。

○丸山 ありがとうございます。それから、ミビン先生のほうからは、きょうのお話の中で、ベトナムからの優秀な学生さん、日本に留学したときに、日本語も英語もというような、英語の力を維持したい。そのための英語の科目が必要だというような新しい見解もきょう伺えたかなというふうにも思いました。浜崎先生、いかがでしょうか。

○浜崎 ありがとうございます。ちょっといろいろ考えていてうまくまとまるかどうかなんですけれども、入学前に日本語をある程度やってきてほしいというのはもちろんあります。異文化は経済と真逆で、一番新しい学部で、一番小さい学部なので、比較的小回りが利いて、English Track も今つくって、そろそろ4年生が出るんですけれども、そういったコースもあるということも、こちらとしてはぜひ周知していきたいということを考えています。

ただ、先ほど最初に菅沼先生のお話の中にあっただよように、留学している学生たちのヒアリングであるとか、担当教員へのヒアリングを受けて、やはり日本語力のところでいろいろなつまずきがある。これは入学時までの日本語力の問題だけではなくて、最初に専門的な概念でインプットをするときの問題。でも、これはおそらく日本人の学生も同じように抱えている問題だろうと思います。次にアウトプットしなくてはいけなくなったときに、もう1つ別のつまずきがあるのかな。今、私もちょうどことし4年生、卒業論文、台湾からの留学生を見ていましたけれども、言葉で、やっぱり口頭でアウトプットするときと書くときのアウトプット、それも1年生のレポートと4年生の卒論とではやはりつまずき方が違う。ただ、その学生も日本語支援相談室に定期的に行って、かなり最後の半年でクオリティを上げました。そこで私も気がついたのは、日本語支援をするときに、入学前の学習、それから1年生に入ってきたときにどう上げていくかわけではなくて、それぞれのフェーズで支援が必要なのだというのを、私も身をもって痛感しました。

そういった体制をもちろん学部の専門性を生かしながら学部の中でやるということとあわせて、やはり全国的にそういったところのサポートの体制というのを

つくっていく必要があるのではないかなと思います。

○丸山 ありがとうございます。菅沼先生、どうぞ。

○菅沼 それから、英語の教育というのは、大学に入ってから英語の学習というものは、日本人も留学生も共通しての課題です。共通して身につけなければいけないものであると考えております。ですから、日本の大学に入学したからと言って英語の勉強が継続してできないということはない。むしろそのようなことがないようにしなければいけないと考えております。

○丸山 ありがとうございます。そこも立教の売りにしていけるといいなというふうに、どうぞ、池田先生。

○池田 多分、ご懸念は、日本人の学生が英語力をつけるというのとは全然別で、おそらくベトナムの高校生が持っている英語能力はかなり高い。そのままベトナムにいれば、欧米の大学、大学院というところが見えている学生が、いわゆる日本の大学の環境に置かれてしまうことで、自分の英語力が落ちてしまうという懸念だと思うんですね。なので、立教大学としては、やっぱり英語で受ける専門科目の授業というのをきちんと豊富にそろえることで、そういう学生はそういう科目も履修しながら立教大学で学んでいくことで、英語能力も維持しつつ、日本語力もつけていくというところは重要なんだろうと思っています。

○丸山 ありがとうございます。個人的に、留学生を見ていての小さなケースではあるんですけども、入学時に日本語力が低くて、英語トラックに行きたいかもと思っていた学生が、半期過ごしてみても何とか乗り越えられたと感じたときに、せっかく日本にいるんだから日本語のトラックで卒業したいと言って、自分で日本語トラックでがんばることを決めたケースもありました。そういうふうに考えると、入学時の最初の日本語力をもうちょっと見守るといって、先ほど浜崎先生がおっしゃったように、幾つかのフェーズで違う支援の仕方があるのかなということも感じたところです。ありがとうございます。ほかにいかがでしょうか。小澤先生、どうぞ。

○小澤 座ったままで失礼いたします。大変面白いお話をありがとうございます。今の話の流れで、1つはコメントで1つは質問なんですけれども、冒頭で池田先生がおっしゃっていたように、卒業してからの進路とか、進学、就職を含めて立教が責任を持って引き受けるということが非常に重要というのと今のお話はすごくつながっていて、日本に来たために、教科のほうでも教科のほうでも大

学受験に間に合わないので勉強になってしまったり、21世紀スキルでいろいろな中等教育でやっているものが、日本に来たら座学中心で、そういうものが学ばなくて、グローバルに活躍できない人材にならないように立教がいろいろ考えられるというのは非常にすばらしいなと思ったのがコメントです。

質問なんですが、日本語がある程度できる中等教育の高校生に対して、大学が出張授業で4分野、5分野で大学の売り込みをするのはできるかなと思うんですが、日本語があまりできない、実は英語もそんなに上手ではないというようなところで、どうやったら大学の学びのよさ、日本語力をつけるではなく、大学の学びのよさを訴えるためにはどんな方法が考えられるのかなというのは、きょう聞きながら思っていました。何かいいアイディアがありましたら、ぜひお聞かせください。

○丸山 ありがとうございます。論点2のあたりにかかってまいりましたが、どなたかいかがでしょうか。どうぞ、池田先生。

○池田 そういう学生さんに対しても、立教大学としては積極的に立教大学の魅力を伝えたいと思っています。そういうときには、個人的には立教大学の学生、もうすでに立教大学で学んでくれているいろいろな国からの学生にぜひ活躍していただいて、一緒にそういう高校を訪問したいと思います。まずは。

○丸山 ありがとうございます。菅沼先生はいかがでしょう。

○菅沼 立教大学は、ある意味で非常に面倒見がいい大学というんですかね。一人一人の学生を大切にするというので、目配りをするようにしているということで、例えば、いわゆる落ちこぼれそうになった学生に対するケア、そうしたものを非常によくやってるということと、それから、やはり全学での、立教大学の理念である自由の学府であるとかリベラルアーツというところでの幅広い教養と、それから寛容な精神とか、そうしたところが魅力ではないかなと。ですから、池田先生が言われたことと同じなんですけれども、今、立教で学んでいる学生や卒業生を見てほしいなと思います。

○丸山 ありがとうございます。はい、どうぞ。

○オオサカ オオサカと申します。きょうはアンナ先生と日本語教師友達で、立教のキャンパスに久しぶりに入ったんですけれども、現在、都内のビジネス専門学校で留学生約100名ぐらいに教えております。

その中で、立教大学といたら、僕らの世代というのは、「St.Paul's will

shine tonight」、セントポール大学というぐらい、僕は総合商社にずっといたんですけども、仲間は、「ああ、セントポール出身ね」というふうな漢字で、立教とあまり言わなかった世代で、すぐグローバル化が大学の中でもとても進んでいる学校だなというのが商社時代の立教。たまたま体育会にいたものですから、立教とやるときには、僕も「St.Paul's will shine tonight」を、立教じゃないんですけども、歌えるぐらいセントポールという名前が通っていました。

先ほど堀中先生から、国内では立教は本当に有名ですね。僕みたいなグローバルで仕事をしてきた商社マンとして見ても、セントポールという名前はすごくあった。でも、今、都内のビジネス専門学校で100名ぐらいの留学生を教えているんですけども、やっぱり就職する人は日系企業、あとは大学に進学する中で、立教大学、先ほどのリベラルカレッジとか、国際友愛とか、とても面倒見のいいというイメージがあるものですから、都内にいる留学生から、専門学校から立教に編入学とか、あまり出てこないんですよ。いや、僕は立教というのはすごくグローバルで面倒見のいい大学だから、立教も勧めたいな、セントポールを勧めたいなという意識はあるんですけども、今ちょっと非常に少ない。1.5%、堀中先生の説明でもありましたけれども、留学生比率が少ない。また、中国、韓国に偏っているという現状の中で、今は専門学校というのは本当に日本人学生が少ないので、自分が教えているビジネス専門学校も留学生がほとんどで日本人がやっぱり、みたいな状況になっているんですけども、中国人、韓国人はあまりいないんですよ。なぜかというと、専門学校というのは、中国や韓国人の人は固まっちゃうんですね。だから、中国人とか韓国人が行っている都内の専門学校と、そうでないところで分かれております。結構、学校によったら、中国、韓国以外の学生もかなり入ってきてるというのが、今の都内の専門学校の現状ですね。

ちょっと長くなりましたけれども、質問は、今、センターポールと、立教大学の人たちは言わなくなったんですか。今ずっとお聞きしている中で、グローバル化の中でセントポールという名前が出てこない。セントポールで、本来なら、この発祥からいったら、立教大学の歴史からいったら、一番グローバル化を明治時代ですべてできた建学の精神がありますよね。そこからいったら、もっと留学生が、そんな1,000人ぐらいじゃなくて、さっき拓殖大学で1万人の中で1,000人という話ありましたけれども、もっとあってもいいんじゃないかなというイメージが立教大学と長年付き合ってきた、今、日本語教師の立場ではあるんですけど

れども、いかがでしょうか。

○堀中 本学の英語名称としては、セントポールでなく、Rikkyo University なんです。確かに過去にはセントポールという言葉も使われていたように思うのですが、そのあたりの経緯についてはおそらく先生のほうがお詳しいかと思います。おっしゃるとおり、海外へ行くと、セントポールと書いてあるほうが、ここはキリスト教の学校なのねというイメージももちろんつくと思います。海外の留学フェアにおいて、Rikkyo University と看板を掲げ、そこに漢字で「立教大学」と記載があっても、「ここは私立ですか、国立ですか」「宗教は何ですか」、という質問もあるので、おっしゃるとおり、そこはかなりイメージとしてはあるとは思いますが。

○池田 セントポールの説明は以上ということで、いや、セントポールを使わなくなった理由は。

○オオサカ 応援歌がありますよね。

○池田 あります。その応援歌は今でも使い続けられています。ただ、大学の正式名称ということで表に出していくときには、やっぱり立教大学で、その英語に対応するものが Rikkyo University ということで、セントポールというのは、多分、あくまでも愛称というか通称。池上先生。

○丸山 お願いします。

○池上 本学の創立者であるウィリアムズ主教が“St. Paul’s School”と命名したと言われていますが、少なくとも現在の正式な英名は“Rikkyo University”です。上智大学は“Sophia University”だそうですが、そこは方針が違うんですね。

○丸山 ありがとうございます。それから先ほどおっしゃってくださった、面倒見がいいというのは、「今も」です。きょう菅沼先生がご紹介くださったように、留学生を増やしていこうというときには、いろいろな形でアンケートをとり、丁寧なインタビューをして、課題を洗い出して、新しい取り組みをしていくというようなことをしている。私もその調査について結果を伺ったのが2年前だと思わうんですけども、非常に感激して、立教に来てよかったなと思ったのを思い出しています。これまでも丁寧ですが、今も丁寧です。

○池田 すみません。数だけ追わないというところだけはしっかりと持っている必要があると思っていて、もちろん目標ですので、それを目指すということは大

事ですけれども、数を追うのではなくて、繰り返しになりますけれども、立教大学が責任を持って受け入れて、責任を持って教育して、責任を持ってきちんと出口まで連れていくということを前提に受け入れを行っていくということです。なので、急激に数を追い求めるような方向には、立教大学は行かないし、それが立教大学がきちんと国際化について取り組んでいく姿勢なんだろうとは思っています。

○丸山 ありがとうございます。本日予定の時間が5時終了で、すでに予定時刻を過ぎているんですけれども、ここでぜひという方がいらっしゃるかもしれませんが、ご質問を受けたいと思いますが、よろしいでしょうか。どうぞ、秦さんから。

○秦 すみません、日本学生支援機構東京日本語教育センターの秦と申します。きょうは非常に興味深いお話をありがとうございました。

立教さんが今回、留学生の受け入れを増やすと聞いて、ちょっとお話を聞かなくてはと思って来ました。日本語学校側として一番気になったのは、日本語学校を経由しなくてもとるようなお話でもあると思うんですけれども、実際のところはEJUの試験で7割は日本で勉強しているという留学生さんが応募しているということがあると思うんです。

それで先ほどの経済学部菅沼先生のお話で、基準を緩めたら留学生の数が増えましたとありました。日本語面でちょっと問題ある人のことをいろいろ本当に丁寧に見ていただいているので、今まではEJUで切って、日本語で日本人と遜色ないくらいやっていける学生をとっていたところから、ちょっと広めたということだと思うんですけれども、今後はこの先そういう人たちがいっぱい来る、多様な入試ということをすると思うんです。非常に丁寧に見ていただけるんだろうなというところはあるので安心なんですけれども。

それで、先ほどの日本語能力はちょっと置いておいて、入ってから育てられる部分があるかな。日本語能力じゃない潜在能力のところを見て、何とか人をとりたいたいというのを、今お考えの段階だとどういった能力が、例えば、うちの学生で見ると、やっぱり非漢字の学生、非常にまじめに一生懸命勉強しているんだけど、漢字圏の学生にはちょっと点数的には追いつかない。この人が大学入ったらすごく頑張ってやっていくんだろうなというところは非常に見えるんだけど、それを大学の先生方から見ると、日本語はじゃあちょっと置いておいたときに、どの辺で判断、どういうものが欲しいと思われているのか教えていただけま

すでしょうか。

○菅沼 やはりポテンシャルな能力。入学してからの伸びる能力というのはどうやって見るのかというのは難しい問題なわけです。答えはないと。ただし、例えばほかの科目ですよね。数学であるとか、あと英語もそうなんですけれども、そうしたものを成績がよいということは、学ぶ力とか、そのポテンシャルな能力というのはあるのかなというところで、つまり多角的に見ていくことによって、そういう制度、学生を見つけていくということなのかなと思ってます。いろいろ考えてはいるんですけども、具体的なものはまだ出ていないという段階でございます。

○堀中 1つご参考までに、先ほど本学はEJUを利用しているという話をしましたが、出題言語は限定していないので、英語で受験した場合でも出願可能です。

○丸山 ほかにいかがでしょうか。

○石渡 拓殖大学の石渡です。きょうのシンポジウムは日本語教育センター、御校のセンターの機能から始まったんですけども、その御校の中に、学部とか大学院のほうに学生を誘致する機能として日本語教育センターのいろいろプログラムがあるんですけども、どういった連携をされてるかなと、参考までに。例えば、日本語教育センター、本学のほうにも日本語教育研究所というのがあって、センターまでいかないにしても、縦割りの組織があって、そこで海外からの、ロシアとか、きのうぐらいまでロシアからの研修生が来ていたんですけども、1カ月とか半年とか提携先から来ているんですが、近い将来的には学部のほうにとか、大学院にも入ったりする学生がいるんですね。交換留学とか。そういった機能があるとしたら、どんなセンターのプログラム、日本語教育を海外の留学生にしているプログラムと、学部、大学院のほうに学生が入ってくるようなつながりがあるとしたら、何か連携を保っているとか、ございますか。

○丸山 はい。本学の日本語教育センターは、本学の留学生全体を対象として日本語教育を行っていますので、すべての学部、研究科の留学生が対象になっています。もちろん交換留学生も対象にしていますし、それから、きょうご紹介申し上げた、非常に短い数週間の超短期のプログラムも行っていきます。

各プログラムが一度にできたわけではなく、一つ一つ順に生まれてきたものなので、そのたびごとに、それぞれが上手に接続していくといいな、例えば、超短期であれば、立教のことをまず知ってもらって、それから日本というのを知っても

らって、それから、大学での学びというのも少し触れてもらって、立教に留学してもいいかもと思ってもらうような設計をすとか、それから、交換留学の場合は、もちろん本学でやっている日本語教育だけではなくて、学部で展開されている科目を学んで本学への魅力というのを感じている学生さんたちなんですけれども、大学院に帰ってくるというような、そういった流れを作っていきたいと思って取り組んでいます。そして実際に一定はできているかなと思っています。

○石渡 その辺を総括して、ちょっとあらためてお聞きしたいなと思って、自分の大学をけなすわけじゃないんですけども、今お伝えしたような機能にはうちの大学はなっていないので、聞いて大変参考になりました。ありがとうございます。

○丸山 ありがとうございます。頑張ります。それでは、お時間ちょっと15分ほど押ししてしまいましたので、そろそろ会を閉じたいと思います。司会の嶋原先生にお渡ししていいですか。

○嶋原 先生方、どうもありがとうございました。

